

長野県立歴史館

Nagano Prefectural
Museum of History

衣—あむ・おる・きる—

信濃の風土と歴史 ⑥



はじめに

日本人は生活文化を「衣食住」ということばで表現してきました。衣がその筆頭に出てくることは、衣生活の重要性を端的に示していると思います。人類は衣服をまとうことで、暑さや寒さを防いで身を保護したり、外敵から身を守ってきました。衣服の素材一つとっても、時代とともに保温性、吸湿性により優れた繊維が使われるようになりました。「日本の風根」といわれる信州では、冬の寒さがきびしいために、開放的な衣類ではなく、山袴(モンペ)や綿入りの筒袖のような衣服が用いられていました。

古代シナノクニは、科野国と書かれることもありましたが、それは信州の山野にシナノキ(科の木)が多く自生していたからだともいわれています。シナノキの樹皮はたいへん丈夫なので、科繩のほか科布が大量に織られていました。また野生のカラムシ(苧麻)、栽培したカラムシや麻(大麻)からも、布が織られていました。一方、ツキノワグマ・カモシカ・シカなどの皮は防寒用衣料として最高級品でした。縄文の昔から近代まで山村では野生動物の皮は多方面に使われてきました。古代からつくられた繊維品に絹があります。古くは山桑を採取して蚕を飼い、できた繭から生糸をとり、それで織ったものが絹織物です。七一七年朝廷が信州に調(特産物を貢納した税金)として、綿を納めることを命じています。当時品質が落ちる絹を綿といいましたが、信濃国では高級な絹織物をつくるのが難しかったことを示しています。この絹を庶民でも着るようになるのは江戸時代中期以降で、それも日常ではなく、晴れ着として着るのが一般的でした。

世界的にみて現在でも最も利用されている繊維は綿糸です。畿内や尾張・三河(愛知県)のような先進地では、室町時代に棉花の栽培が始まりました。しかし国内生産が不十分であったため、朝鮮や中国から大量の綿布が輸入されていました。信州では江戸時代中期以降、長野盆地を中心に棉花栽培が発展しました。ところが足袋底や足袋の日本有数の産地であった松本では、棉花はほとんど栽培されずに、尾張・三河・越中(富山県)あたりから練綿が移入されていました。また西日本から古着が信州に送られていました。江戸時代、信州の山間地では大麻が大量につくられ、麻布に織られたり、漁網の原料として北陸・東海の漁村に送られていました。江戸時代後期、信州では蚕種製造や蚕糸業が盛んになりました。一八八〇年(明治一三)には長野県は日本第一の蚕糸王国に成長しました。第二次世界大戦前まで県経済の四分の三は、蚕糸業とその関連産業によつてしめられていました。信州・長野県の歴史をみると、ここで使われてきた繊維や衣服をぬきにして語ることはできません。皆さんは本書を通して信州人の衣生活や暮らしのあり方を勉強してください。

二〇〇〇年二月

信濃の風土と歴史⑥

衣―あむ・おる・きる―

はじめに

目次

土偶と縄文人の服装	4
卑弥呼の時代の衣服	6
埴輪と武人たちのよそおい	8
アクセサリーの誕生	10
糸を撚り布を編む	12
北村人の衣服の復原	13
身分で変わったよそおい	14
都人が身につけた信濃の布	18
善光寺に集まった人びと	20
「衣」をつくった職人たち	22
北信濃の青布と越後布	24

近世信濃の麻衣	26
木綿時代の風俗	28
絹衣料のひろがり	30
城下町絵巻にみる風俗の変化	32
染物屋と染料	34
地機と高機を使った織物	36
洋服がやってきた	38
ミシンはマシーン	40
国際商品としての生糸「信州上一番」	42
スポーツの始まりと衣服	44
第二次世界大戦中・戦後の服装	46
女学校制服のうつりかわり	48
日本人が使ってきた天然繊維	50
参考文献	52
協力者のみなさん	53
あとがき・利用案内	54

土偶と縄文人の服装



パンツのような文様の土偶
波田町葦原遺跡（松浜学園高校蔵 複製）



服のような文様の土偶
辰野町新町泉水遺跡（辰野町立美術館蔵 複製）



靴の形をした土器
豊野町大久保遺跡（東京大学総合研究博物館蔵 複製）



髪形のようなすが分かる土偶
岡谷市中島A遺跡（長野県立歴史館蔵）

◆土偶の服装

縄文人の服装を考えると、思いうかぶのは遺跡からみつかると土偶ではないでしょうか。

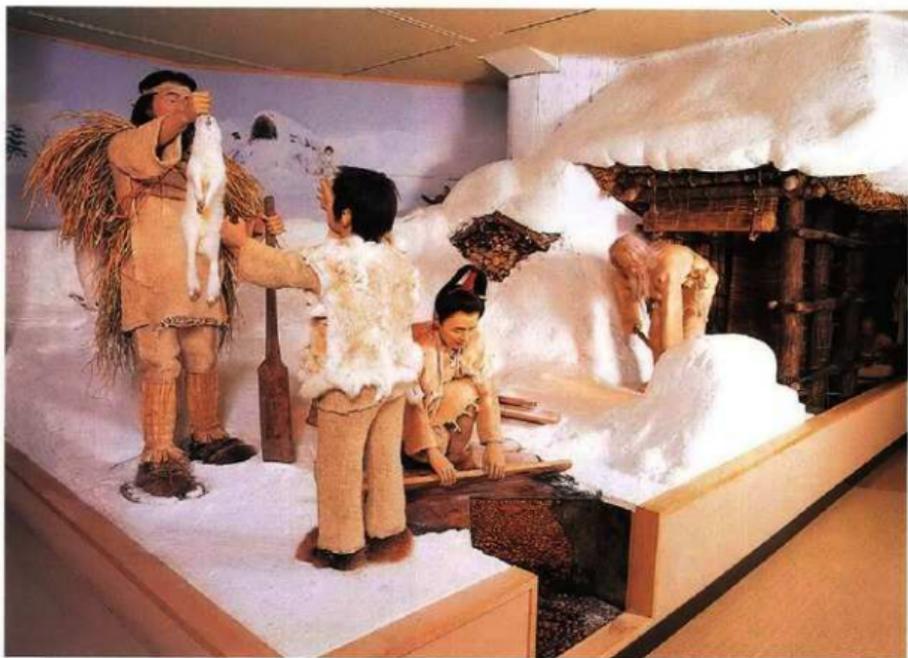
土偶にみられる模様は、縄文人の様子をそのまま表現しているわけではないのですが、どのような服を着ていたかを考える手がかりになります。

◆縄文人の服

縄文人はいままで毛皮の服を着ていたと思われていました。しかし、発掘調査で植物繊維を使って編んだ布片が発見され、これらをもとに当時の布の復原が進みました。そして、縄文人は繊維を編んだ編布で作った服を着ていたと考えられるようになりました。

発掘された例はありませんが、縄文人は冬の寒さをしのぐのに、毛皮も着ていたと思われる。

最近、復原された縄文の布と土偶の模様をもとに、はなやかな縄文ファッションの服もつくられています。これを見るとおしゃれな縄文人のすがたがうかがえます。



縄文人の毛皮を使った冬の装い (十日町市博物館提供)



革新的な縄文ファッション (尾関清子氏提供)

卑弥呼の時代の衣服



顔付きの土器
中野市七瀬遺跡
(長野県立歴史館蔵)



顔付きの土器
長野市篠ノ井遺跡群
(長野県立歴史館蔵)



土偶型容器
丸子町測ノ上遺跡
(東京国立博物館蔵 複製)

當在會稽東治之東其風俗不淫男子皆露紒以木絲招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人被髮垂紒作衣如單被穿其中央實頭衣之種木箱紒麻絲奈絲織出細紒練絲其地無牛馬虎豹手鷄兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鏡或骨鏡所有無輿擔耳朱塗同倭地溫暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟則息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也食飲用邊豆于食其死有棺無槨封土作冢始死停喪十餘日當時不食肉長王哭泣他人就歌舞飲酒已葬舉家泣水中涕

『魏志』倭人伝部分

『三國史卷三十倭人伝』より (大阪府立中之島図書館蔵)

◆弥生人のすがた

弥生人の服装を想像させるものとして、三世紀に中国で書かれた『魏志』倭人伝わつじんがあります。このなかには「貫頭衣かんどうい」や「横幅よこはば」など、弥生時代の人びとの服装や風俗について記されています。

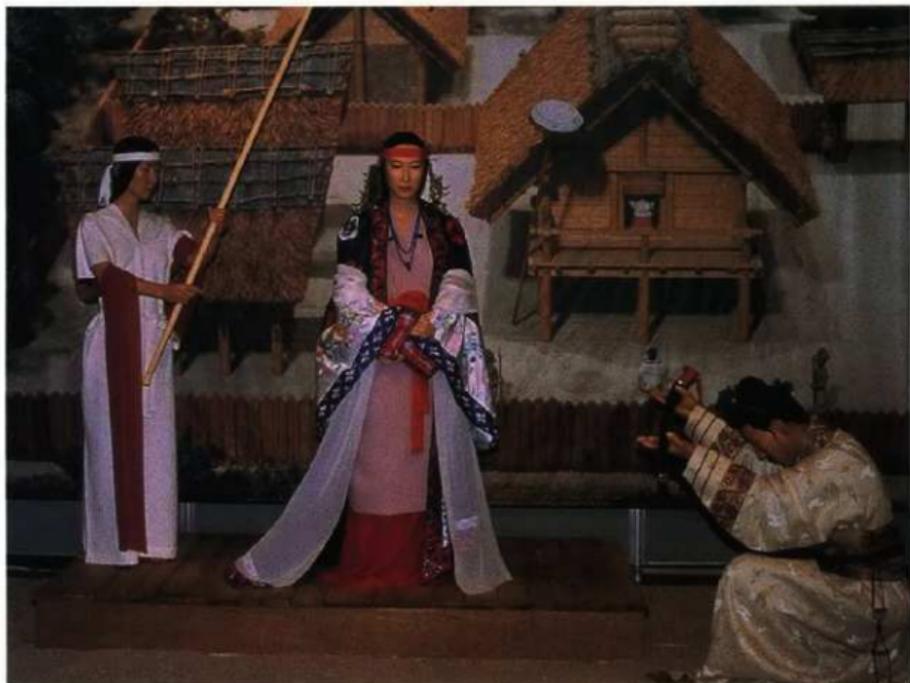
遺跡から出土したこの時代の土器や土製品、銅鐸どうたつなどにも、人を表現したものがあがり、わずかながらも彼らのすがたをかいま見ることができます。

◆卑弥呼の装い

耶馬台国やまたいこくの女王卑弥呼ひみこはどんな服を着ていたのでしょうか。

弥生時代の遺跡からは、絹や麻で織られた布の破片がみつかっており、織物があったことがわかります。絹は、この頃に大陸から伝わった文化の一つと考えられています。権力者でもあり、宗教的な指導者（シヤーマン）でもあった卑弥呼は、弥生時代としては貴重な美しい絹を身につけていたと思われます。

(寺内貴美子)



耶馬台国の卑弥呼と従者の姿 (大阪府立弥生文化博物館提供)



弥生人の庶民の様子 (大阪府立弥生文化博物館提供)

埴輪と武人たちのよそおい



（左）鎌をもつ男子
左の肩に鎌をかけた農夫と思われ
れる埴輪
群馬県赤堀村
（東京国立博物館蔵）



盛装した女子
文様のある上衣と綾織の装をつ
けた女性の埴輪
群馬県伊勢崎市八寸
（東京国立博物館蔵）



盛装した男子
裾の広がった上衣と大刀をつけ
た身分の高い男性の埴輪
群馬県太田市宝泉
（東京国立博物館蔵 重要文化財）

◆埴輪の服装

古墳から出土する埴輪には人や動物、家
などをかたちどつたものがあります。

人を表現している埴輪には、身分の高そ
うな人から、巫女や農夫と思われる人まで
さまざまあります。これらの埴輪から、当
時の人の服装や髪形、履物などをうかがい
知ることができます。

◆シナノの武人

武人の埴輪を参考に復原したシナノの武
人は、料野布の服とシカ革の靴を身につけ
ています。装着している武器は、飯田市鐘
塚古墳出土の短甲と飯田市妙前大塚古墳出
土の肩庇付冑をもとに作ったものです。

◆装う馬

長野県では、馬の骨や馬にかかわる出土
品が数多くみつかっています。

遺跡からみつかる装飾的な馬具や埴輪馬
から、馬もお祭りなどの特別な時には着飾
られていたことがわかります。権力をもつ
者は、力を示す手段のひとつとして馬を利
用していました。

（寺内貴美子）



北西の久保遺跡出土の埴輪群 (佐久市教育委員会蔵)



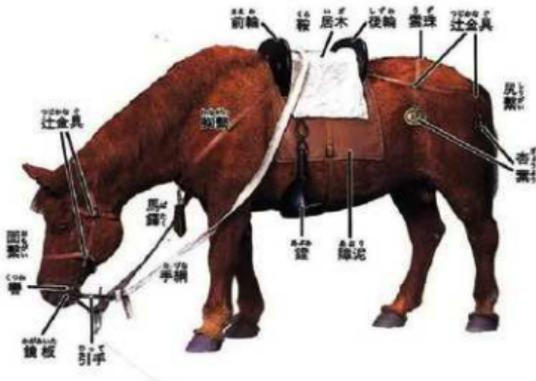
シナノの武人
(長野県立歴史館蔵)



巫女
佐久市北西の久保遺跡
(佐久市教育委員会蔵)



巫女
佐久市北西の久保遺跡
(佐久市教育委員会蔵)



飾り馬と馬具の名称 (長野県立歴史館蔵)

アクセサリーの誕生



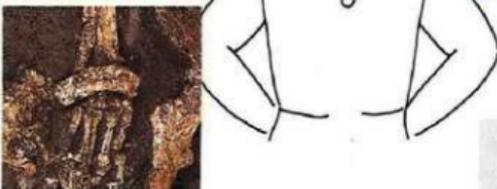
骨製のヘアピン
橋原岩輪遺跡
(北相木村教育委員会蔵 複製)



土製耳飾り
松本市エリ穴遺跡
(松本市立考古博物館蔵)



ヒスイ製のペンダント
糸魚川市小滝川周辺からヒスイを運んできた。
塩尻市上木戸遺跡 (長野県立歴史館蔵)



写真上 イノシシの牙製のペンダント
写真下 イノシシの牙製の腕輪
埋葬された縄文人と一緒にみつかった。
明科町北村遺跡
(長野県立歴史館蔵)

(長野県立歴史館蔵)



ヒスイ製のペンダント
糸魚川市小滝川周辺からヒスイを運んできた。
塩尻市上木戸遺跡 (長野県立歴史館蔵)



土製の装身具
中野市黒林遺跡
(長野県立歴史館蔵)

◆アクセサリーの役割

原始時代の人びとにとってアクセサリーには、単に着飾る以上の意味があったと考えられます。魂が身体から離れたら、悪霊が侵入するのを防いだりする力があるとか、社会的な身分や地位などを示すという理由で身につけたと思われる。

◆骨・石・土のアクセサリー

旧石器時代と縄文時代には自然の材料を使用したものが出土しています。遺跡周辺の材料だけでなく、わざわざ遠く離れた場所までとれるヒスイなどを使用するアクセサリーもあります。

◆ガラス・鉄・青銅のアクセサリー

弥生時代ごろに伝来したさまざまな技術は、アクセサリーにも影響を与え、ガラスや鉄・青銅で作ったものもあらわれます。長野県では、鉄や青銅製の剣と呼ばれる腕飾りが多くみつかっています。

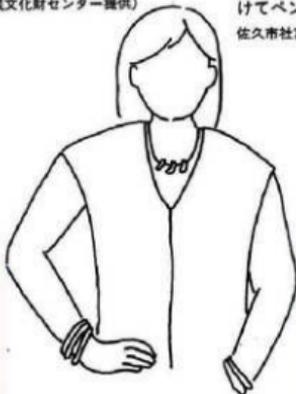
◆金・銀のアクセサリー

古墳からは、金や銀を使用したものやガラスやメノウなど様ざまなアクセサリーがみつかっています。これらは墓の主の権力や当時の技術を物語っています。



髷まげを塗った髪飾
長野市松原遺跡
(長野県埋蔵文化財センター提供)

多色細文鏡片ペンダント
青銅製の鏡の破片に穴をあけてペンダントにしている。
佐久市社宮司遺跡 (個人蔵 複製)



びりしり銅製
長野市篠ノ井遺跡群 (長野県立歴史館蔵)

土製勾玉とガラス玉と管玉
長野市篠ノ井遺跡群
(長野県立歴史館蔵)



耳飾り
長野市松原古墳
(長野県埋蔵文化財センター提供)



耳飾り
飯田市地味1号古墳
(飯田市教育委員会蔵 復原複製)



冠
松本市桜ヶ丘古墳
(松本市教育委員会蔵 復原複製)



石製の腕飾りと玉類
長野市石川糸里遺跡 (長野県立歴史館蔵)

いろいろな玉類
長野市大星山古墳群
(長野県立歴史館蔵)



糸を撚り布を編む



鳥浜貝塚の装飾編み物
(福井県立若狭歴史民俗資料館蔵)



鳥浜貝塚の細縄
(福井県立若狭歴史民俗資料館蔵)



三内丸山遺跡の編み物
(青森県教育庁三内丸山遺跡対策室蔵)



長野市春山B遺跡の布
(長野県埋蔵文化財センター提供)

◆撚る

縄文人の縄を撚る技術は大変進んだものでした。縄文土器の表面に残る縄目からもよくわかります。撚った糸を使って縫い物をしたと思われる骨製の針もみつかります。

◆編む

芟やや小枝、撚った糸、竹などの細長く柔らかな材料を打ち違ちがいにしたり、合わせ組んだりして、衣類や容器を作ることを編むといえます。編むことで細長い材料が思うような形や大きさに組み上げることができるようになりました。衣類や籠、網などの用途に応じて多様な編み方が発達しました。縄文人はアカソ(赤麻)・カラムシ(芋麻)・アサ(大麻)などの繊維を利用して衣服を作ったものと思われまます。衣服の実物はみつかっていませんが、遺跡から出土する布や土器底部に残る圧痕あしあとなどから、衣服の主流は織物ではなく、繊維を編む編布あみふであったようです。弥生時代になると、編布は衰退し、織物の時代となります。これまでも利用された植物繊維の材料のほかに、絹のような動物繊維も利用されるようになります。

(小初美男)

北村人の衣服の復原



織布を編む（新潟県十日町市博物館提供）



栃原岩陰遺跡の骨針
（北相木村教育委員会蔵 複製）



復原された北村人の女性と衣服
（長野県立歴史館蔵）

◆カラムシでつくられた糸

県立歴史館の常設展示室には、前かがみで木の突を粉にする作業姿の女性が復原されています。衣服は福井県鳥浜貝塚（トウハマカイツツ）などからみつかった編布をもとに編み方を復原して造りました。材料は山野に自生していたカラムシです。これを刈り取って葉を落とす、茎を水に漬けて皮をはぎ取り、その繊維を取り出して乾燥させます。これに撚りをかけて糸を紡ぎました。経糸（タタミ）にもちいた細い縄はのべハ〇〇股にもなります。

◆完成まで三か月

こうして作った糸は、筵編み機（タタミ）のような道具を使って編みあげました。これは糸をおく場所に刻目（きざみ）をつけた板を二本の脚で支えただけの簡単な道具です。両端におもりをつけた糸（経糸）を、刻目にかけて吊し、その上に経糸と直交するように軽く撚った織維（緯糸）をおきます。そこに、経糸をからめるように交差させて編んでいきます。一日に編み上げる量はわずかに二センチで、完成まで三か月かかりました。また、前掛けは野生のアカソを材料に造られています。

（小初義男）

身分で変わったよそおい



高松塚古墳壁面にみる女子像
(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館蔵 国宝)



天寿国曼陀羅繪幀にみる推古朝の男子像
(中宮寺蔵 国宝)



7世紀後半の男子像・女子像（復原）
(大阪府立近つ飛鳥博物館蔵)



7世紀前半の男子像・女子像（復原）
(大阪府立近つ飛鳥博物館蔵)

◆身分に依じた服

私たちは衣服を着るとき、自分の個性や好みによって色や形を選びます。しかし、明治時代以前、とりわけ古代・中世では、衣服はその人の身分を示す手段のひとつでした。織物の素材や織り方・色は身分に応じて決められていました。自分の好みで好きな衣服を着ることはできなかったのです。

◆大陸・朝鮮半島を模倣した服装

六〇三年、聖徳太子は朝鮮半島や中国の制度にならい、日本で最初の服装の制度である冠位十二階を制定し、徳・仁・礼・信・義・智の位階に応じた衣服と冠の色を定めました。六四五年の大化の改新を経て、律令制度が整うなかで、位階と衣服の制度も決められていきました。

一五ページの表は八世紀はじめの国の法律である律令によって決められた衣服の色を示したものです。この法律では、これまでの冠にかわって、上衣の色によって位階が表されるようになりました。

信濃の国内では、国の責任者である国司が五位、各地の豪族である郡司が八位くらいでしたから、ほとんどの庶民はこうした



平安時代の女房被束（復原）
 (国立歴史民俗博物館蔵)



聖徳太子画像にみる朝服
 (宮内庁蔵 写物)

律令の位階と服色

	皇太子
	親王、諸王・ 諸臣の一位
	諸王二位～ 五位、諸臣 二・三位
	四位
	五位
	六位
	七位
	八位
	初位



下級役人が着用したベルトの金具
 松本市下神邊跡ほか (長野県立歴史館蔵)



8世紀の男子像・女子像（復原）
 (大阪府立近つ飛鳥博物館蔵)

服は着ることができなかつたことになりま
 す。また、県内各地の遺跡から役人がつけ
 たベルトの金具（バックル）がみつかって
 います。ベルトも身に合った服装の一部
 でした。

◆大陸風から日本風の服装へ

平安時代にはいり、遣唐使が中止される
 と、大陸風の衣服が日本独自の服装に改め
 られていきました。その結果生まれた服装
 の代表的なものが、宮廷の儀式の際に身に
 つけた男子の束帯と女子の女房被束です。
 また、天皇・皇太子のみが着ることのでき
 る衣服の色や織り方が決められたり、十二
 単衣のように重ね着による色構成の美しさ
 が競われたりしました。

◆武家の服装

平安時代後半に武士が歴史の表舞台に登
 場し、鎌倉幕府が成立します。しかし、そ
 の服装は平安時代の貴族の服装と大差ない
 ものでした。武家の儀式用の服装は、上級
 の武家は公家と同様で、中級・下級の武家
 は平安時代中ごろに公家の軽装であった狩
 衣や下級官人の公服のひとつであった水干
 でした。また、平安時代後期に庶民の日常



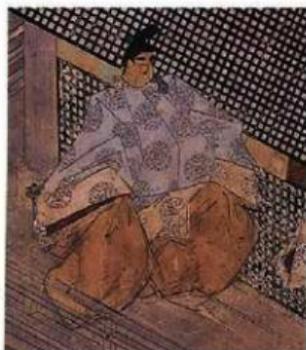
「源頼朝像」にみる束帯
衣服の生地を糊や織り
方で固くこわばらせた
強装束。

(神護寺藏 国宝)



紫式部日記絵巻にみ
る衣冠

(五島美術館藏 国宝)



着であった直垂も、室町時代になると正式な服装となつていきました。

◆僧侶の服装

六世紀の中ごろに日本に仏教が伝来すると、皇室や貴族を中心に仏教が受け入れられ、律令国家のもとで仏教は国家が統制するものとなりました。僧侶も国家の統制下に入り、僧侶の着る衣服も貴族・官人の服と同様に国家が決めました。

僧侶の服は、仏教が生まれた北インドで俗人が捨てた布を拾って縫い合わせたことからはじまっています。中国や日本に仏教が伝わり、衣(袈裟)の形もさまざまなのが伝わりました。

袈裟も僧侶の位に応じて身につけられるものが決まっております。師匠である僧侶から後継者の弟子に与える「伝衣」は大切にされ、今に伝えられています。

(福島正樹)



絵巻にみる中世の人びと

石山寺造営にたずさわる役人・僧侶・袖(きこり)・大工のすがた。中世のさまざまな階層の人びとの姿が描かれている。(石山寺縁起絵巻 石山寺蔵 国宝)



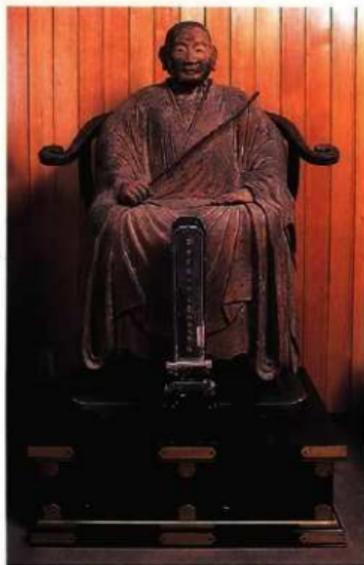
かいざんでん 開山伝衣

西福寺の開山にあたって、師匠が弟子に授けた装束。

(塩尻市西福寺蔵)

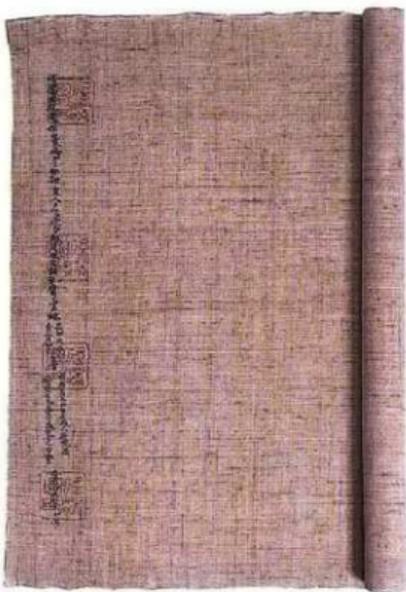


開山伝衣に記された墨書
1560年(永禄3)に才応総主
が主殿球白に授けたことが記
されている。



安楽寺(上田市)の開山である種谷惟仙和尚の坐像 僧侶の服装である装束を身につけている。
(安楽寺蔵 重要文化財)

都人が身につけた信濃の布



正倉院にのこる信濃の白布
 白布に記された文字から筑摩郡山家郷（現在の松本市山辺あたり）の物部東人が天平勝宝4年（752）に税として納めたことがわかる。当時の信濃国の役人や筑摩郡の役人の名前もみえる。（正倉院宝物 模造）

麻の糸をつむぐ（おうみ）



布を織る（機織り）



税の布を確認する



税を都へはこぶ



◆古代の布

古代では、布は人びとが身につける衣服になるほか、いろいろな物と交換されてお金のような役割を果たすこともありました。このため、奈良時代には、布は米とともに人びとが政府に納める主な税の一つとして位置づけられていました。

布はカラムシ（苧麻）の繊維をつないで撚りあわせた麻糸から織られます。当時は一年の税として大人の男性一人あたり幅約七ヤシ、長さ一・四七メートルの布を納めなければなりません。奈良市にある正倉院には奈良時代に税として信濃国から都に運ばれた白布（麻布）がのこされています。

◆麻の衣服

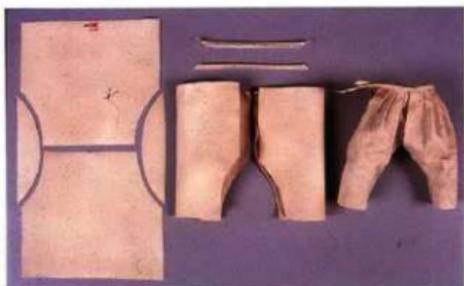
こうして納められた布はさまざまな用途に用いられましたが、上着や袴などの衣服に仕立てられて都で働くさまざまな人びとに支給されることもあったようです。正倉院には、当時の東大寺で働いていた人が、汚れた衣服を洗濯するために四日間の休暇を願い出た文書がのこっています。当時の都人にとって、麻布の衣服は大切な物だっ



正倉院正倉 (奈良県奈良市)



東大寺で働いていた人の姿
正倉院の文書にのこる絵に袴と足を加えたもの。



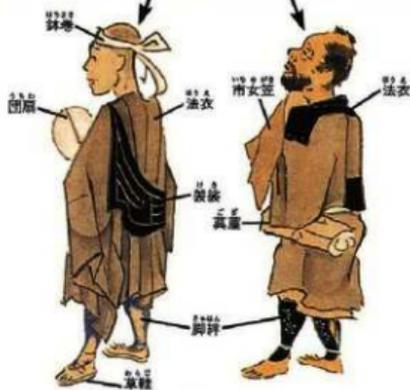
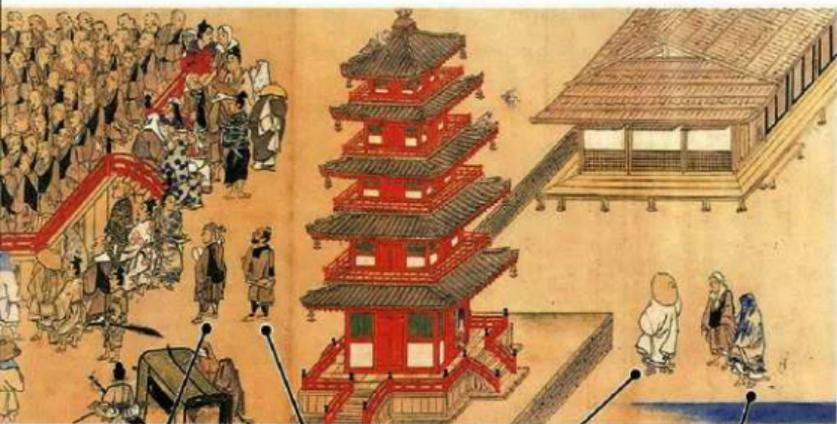
僧^{びく}濃の
布から袴を仕立てる



僧濃の白布から仕立てられた袴
信濃国の印のこっているので僧濃からの
白布でつくられたことがわかる。
(正倉院宝物 模造)

たのでしよう。信濃の布は平安時代以降も
特産品として有名でした。
(傳田伊史)

善光寺に集まった人びと



僧侶たち



旅の女性たち

◆かぶるもの・はくもの
 武士たちは頭に折烏帽子をつけ、草履を履くものが多いようです。僧侶には鉢巻や頭巾、市女笠のほか傘をさす人もいます。草鞋のほか、裸足のものや足駄とよばれる高い下駄を履いている人もいます。

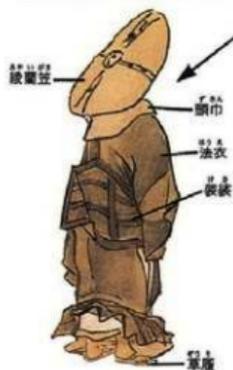
(伊藤半子)

◆さまざまな服装
 武士は直垂と小袴を身につけ、扇を持つものもいます。僧侶は法衣に袈裟をかけて足に靴下のような脚半をつけています。なかには団扇を持つ人や、蓑蓆を腰につけているお坊さん、毛皮を背中にあてている僧尼もみえます。旅の女性たちは頭から被衣をかぶったり、市女笠に桂を着ています。また鼻緒ずれを防ぐために草履に布を挟んでいる人もみえます。

◆絵巻に描かれた人びと
 鎌倉時代の善光寺には、全国からたくさんの人びとが参詣に訪れていました。その様子は『一遍上人絵伝』などの絵巻にも描かれています。そこに描かれた武士や僧侶、旅の女性たちの服装をみてみましょう。



一遍上人絵伝 (東京国立博物館蔵 複製)



僧尼



旅の男



武士



山伏



足半

尻切 (しりきれ・しきれ)、半物草 (はんものくさ) ともいう。当時の人びとの歩き方は、現在の私たちの靴を履いた歩き方とは異っていたと考えられる。

(長野県立歴史館蔵 横造)



草鞋

切わらを編んだはきもの。二本の緒(お)を左右の乳(ち)に通して足にしぼりつける。

(長野県立歴史館蔵 横造)

「衣」をつくった職人たち



◀小紋地桐紋付草刺服
（上田市立博物館蔵
重要文化財）



▲革師
革製の衣服や小物を裁断しているところ

◆いろいろな染織品

上田市立博物館にのこる小文地桐紋付草刺服は、上田藩主松平家の祖先にあたる松平信一が織田信長から与えられたという四〇〇年前の皮のコートです。小さな柄は、なめした鹿の革に細かい文様を彫った型紙を置き、白色で染め抜いてあります。また、中世にはじまる能染の華やかな装束にも高度な染織の技術をみるることができます。

◆職人のすがた

こうした衣服はどんな人がつくっていたのでしょうか。「職人絵」をみると機織り、組み紐、縫師、革屋や形置などの製作の工程や素材にあわせて、職人たちが腕をふるっていたようです。

胴服や能装束を例にして職人たちの仕事をのぞいてみましょう。まず生地作りとして、胴服は鹿革をなめし、能装束ではさまざまな色糸に金銀糸もまぜて機で織って布にします。次に形置師が型染めをして模様をつけたり、縫取師が美しい刺繍をつけます。最後に着物の各部分を縫い合わせてやつと着物が完成しました。（伊藤半子）



かたまりし
▲形置師

▲能装束 紅地水波に菊花文唐織 (真田宝物館蔵)

型紙を使って糊を置く人、色を布につける人が描かれる



またかりし
▲機織師

さまざまな色糸や金、銀糸を緯糸にして文様を織っていく。

ぬいとりし
▲縫取師

刺繍をつけたりする。

p.22~23の絵画はすべて「職人尽絵」(喜多院蔵 重要文化財)

北信濃の青苧と越後布

苧麻の収穫（刈取り）



引いた青苧を束ねて竿にかけ
（福島県昭和村 からむし生産保存協会
提供）

◆苧麻と青苧

イラクサ科の多年草である苧麻からとつた繊維を青苧といいますが、二、三センチほどに束したものを刈り、茎を水に浸して筵でおおって蒸す方法で繊維を取り出すことから、乾蒸（カラムシ）とも呼んでいます。

山野に自生していた苧麻は、かなり古くから衣料の原料とされてきましたが、鎌倉時代の末ころには、これを畑に植えて栽培するようになりました。

中世からの代表的な苧麻の産地は、越後（現新潟県）でした。中世後期には全国の青苧座（苧麻の同業組合）は、京都の三条西家がとりまとめていました。座のなかでは天王寺青苧座が、越後の青苧を大量に買い付けていました。

戦国時代になって、上杉氏の勢力が強まると、そのとりまとめに変化がみられるようになりまし。直江津にあつた越後苧座が、畿内（山城、大和、攝津、河内、和泉）へ進出するようになったのです。中越地方に接した信越国境でも苧麻が栽培され、上布などが越後へ移出されていました。

栽培の作業行程

1年目(定植)	時期	2年目、3年目以降
種付畑準備 (堆肥散布、耕運)	上	上
▼ 苗掘取り(選別)	5月 中	カキタテ、除草
▼ 定植、敷ワラ	下	小滴の日、畑焼、 施肥、圃い垣作り
雑草取り	上	上
	6月 中	畑圃い雑草刈払
	下	害虫防除 (カラムシ虫)
害虫防除 (カラムシ虫)	上	上
	7月 中	(台風による 倒伏に注意)
▼ 雑草取り、刈取り	下	刈取り、皮はぎ、 芋引き、乾燥
	上	上
	8月 中	(二年目アラソ) (三年目カゲソ)
	下	下
害虫防除 (カラムシ虫)	上	上
	9月 中	害虫防除 (カラムシ虫)
	下	下
カヤ刈り(焼草 用、圃い垣用)	10月 上	上
	11月 中	中
	下	下
	上旬	上
	上旬	上

〔「からむし栽培の手引き」〕

昭和村からむし生産技術保存協会発行)

苧麻



◆豊臣秀吉と信濃の苧麻

青苧を原料に織られた越後布は、京都や畿内の人々によって買い求められ、上流社会で贈り物として用いられていました。越後国の守護だった上杉房定が將軍足利義尚に、上杉謙信の子景勝が豊臣秀吉に越後布を贈っています。

豊臣秀吉が天下を統一してからは、北信濃(川中島四郡)の苧麻が大量に越後の直江津湊に集められ、畿内へ輸送されたことがありました。これらは朝鮮へ繰り出す船の大綱として使用されました。

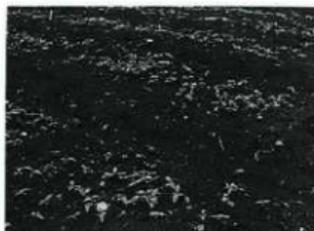
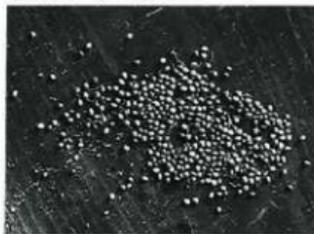
とてもじょうぶだった信濃の青苧は、江戸時代にも、衣料だけでなく、漁網や農業用の縄、船のロープなどにも使われました。

(樋口雄)

近世信濃の麻衣

麻蒔きから麻布がでできるまで

①麻蒔き 麻の種まき



②麻抜き 麻の収穫



③麻剥ぎ 麻の皮を剥ぐ



④麻掻き 麻の皮を繊維だけに
にする。写真は開田村の畑
中たみさん。(昭和40年頃)



⑤麻績み 細くさばいて
つなぐ



大麻取扱者免許証

◆山中麻

麻あさというトアサ料の一年草の大麻たいまのことですが、そのほか苧麻ちゅうま(カラムシ)などの織維おりいも麻あさとよばれました。鎌倉時代、大麻たいまで織られた木曾の麻織物あさおりは木曾の麻衣あさいとして知られ、歌にも詠まれました。

江戸時代中ごろには、衣料の主役が木綿もめんにかわり、麻生産あさせいさんが減りましたが、松代領の水内郡山中地方みづうちぐんやまなか(上水内郡西山かみみづうちぐんにしやま一帯)で栽培された麻は山中麻やまなかあさとよばれ、松本領では、安曇郡北部を中心にさかんに麻が栽培あさくわいされていきました。一七六八年(明和五)安曇郡塩島村しほじま(現白馬村)では、五町四反五畝九歩ごちょうよんはんごうしゅうく(約五四〇・三アール)の麻畑あさばたけをつくっていました。

◆麻荷と中馬荷物

松本領内の麻を一手に扱っていた、松本町問屋倉科氏は、一七三二年(享保一七)に一万四八七五貫いちまんよんやちひゃちご(約五万五七八一キログラム)の麻を出荷し、運上うんじやう(営業税)を百五一両ほど納めていました。一七六三年(宝暦一三)には、松本から名古屋なごやへ約千駄せんた(一駄は二八貫、約一〇五キログラム)、吉田よしか(現豊橋市)へ八〇駄、飯田いひだへ五〇駄な



近世前期の麻衣料
(長野県立歴史館蔵)



麻布
(長野県立歴史館蔵)

⑨機を織る

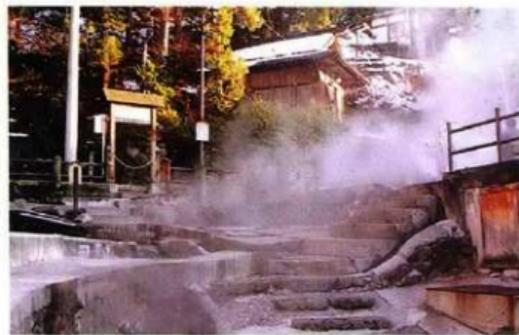


「木曾の麻衣」(開田村教育委員会
澤頭修自氏写真提供)より

⑥麻を撚る 米に撚りをかける



⑦機を繰る 経糸の長さを整える (笠経という)



野沢温泉の麻釜 ここで、刈り取った大麻を天然の温泉で蒸した。



⑧機をはる のりをつけて乾かす

どが出荷されて、麻が主な生産品のひとつでした。

しかし、寛政ころから木綿衣料におきれて、麻織物は衰退していきました。一八二五年(文政八)の四ヶ庄(現白馬村)からおこった百姓一揆(赤装騒動)も麻の買いたたきに反発して起こったのです。

◆木曾の麻衣

鎌倉時代から知られていた木曾の麻衣は、江戸初期の『慶長見聞集』という書物にも「木曾の麻衣は信濃にて織り」とあり、一七五七年(宝暦七)の『吉蘇志略』という書物に、西野・末川(現開田村)、上田・黒川(現木曾福島町)などが麻織物産地として記されています。

慶長期には男は大工仕事で出稼ぎに出て、女子が機織をして麻織物をつくっていました。一八三四年(天保五)刊の『信濃奇勝録』には、木曾の奥山里では男女ともに麻を普段着にしていることが書かれています。

(青木麻希)

木綿時代の風俗



茶屋伊右衛門大福帳
1686年(貞享3)の茶や木綿、麻などの取引がわかる
(長野県立歴史館蔵)

月	木綿(反)	くり綿(貫)
1	(記録なし)	(記録なし)
2	109	6
3	615	16.9
4	283	36
5	780	0
6	203	27.7
7	0	0
8	623	0
9	130	0
10	375	0
11	1647	0
12	612	0
合計	5377	86.6

茶屋伊右衛門の大福帳(2月19日から12月6日まで記載)をみると、この年木綿5,377反、くり綿86.6貫が取引された。



『諸国道中人鑑』

1827(文政10)頃の小諸町篠屋伝右衛門方では木綿類や綿(藁をほぐした真綿)などを販売していた。

(長野県立歴史館蔵)

◆木綿世になった。

一六九六年(元禄九)筑摩郡下波多村(現波田町)の農民が、二〇年ほど前から「木綿世」になったので麻がほとんど売れなくなつたと嘆いています。

一七四二年(寛保二)の水内郡平川村(現三水村)の農民も、もとはおびただしい麻をつくつて他國に売り出していました。が、今ではまったく売れないと嘆いています。一七世紀中ごろから、信濃でも木綿衣料が普及しはじめ、麻生産地を困窮におとしました。

一六八六年(貞享三)の松本本町の茶屋伊右衛門の大福帳をみると、この年で五三七七反の木綿と八六・六貫の繰綿(実綿から実をとったもの)を扱っていました。

◆木綿衣料のひろがり

一七世紀末ごろ、高井郡町川田村(現長野市若穂)の間屋の若旦那は、木綿合羽を新調し見せびらかしたので、人々は木綿合羽の若旦那が通ると噂しあつたそうです。

木綿衣料は、麻と違って柔らかく、染色しやすく、美しい色も多様に出しやすく、少しぜいたくな気分が味わえるため、需要

絹衣料のひろがり



浅葱編子地雪持柳 椿 春草模様内掛
江戸時代後期の作で武家や町方の女性に流行した友禅染め打掛
(長野県立歴史館蔵)



白編子松 竹梅足田紋小袖
江戸時代中期の作。松竹梅の縁起のよい総模様の小袖
(長野県立歴史館蔵)

◆衣服への規制

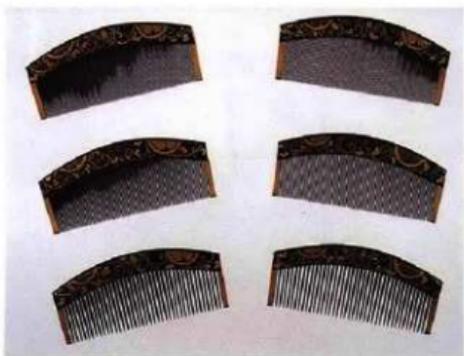
衣服は目につきやすいので、百姓らは贅沢しないで年貢をおさめるようにと、領主から規制されました。一六四〇年(寛永一七)の幕府領佐久郡下桜井村(現佐久市)の五人組帳前書では、百姓の日常着を木綿か紙子(紙でつくった衣服)に限るとし、一六六九年(寛文九)上田領の百姓法度では百姓の衣類は布(麻)・木綿に限るとしていました。

◆華やかな婚礼衣装

一八世紀後半から一九世紀にかけての諸産業の発達により、庶民生活が経済的にも文化的にも向上しました。一八三六年(天保七)の埴科郡下戸倉村(現戸倉町)の豪商坂井家の娘は、婚礼衣装として、飢饉時にもかかわらず、紫色の絹の綿入れ(表地と裏地の間に綿を入れた衣装)や緋色の縮緬(縮のある絹織物)襦袢(和服の肌着)など着物六四品、琥珀色の昼夜帯(表裏が違う色の帯)一〇品などをもっていました。この中には規制されているはずの高級絹織物や簪・弁など上等品がいくつも入っていました。



江戸時代の女性の髪型



大名家の化粧道具 (上) と櫛 (下)
(長野県立歴史館蔵)

◆庶民衣料の多様化

八溝村 (現小諸市) の名主であった小林葛古が記した『幾利茂久佐』という記録には、「寛政年間(一七八九〜一八〇一)ころまでは、子供の衣料は夏のふだん着は麻で、やがて木綿の単物(裏地なしの着物)を着た。弘化年間(一八四〇〜四八)から冬物・夏物ともに絹糸入りの綿になった。男の普段着は帯がなく、手織り、木綿を浅黄色に染め、芯に綿を入れたものだった。羽織は竜紋(太い糸で織った粗い絹織物)から撰系絹(薄い羽二重状の絹織物)の薄羽織に、近頃では、襦子、さらに絹(織目の透いた薄い絹織物)の羽織まで出てきた。一八三八年(天保九)に江戸で羽織を着た婦人を見てあきれたものだったが、今では女も羽織なしでは人前に出られない程になった」など華やかになる一方の衣類の変化が書かれています。江戸後期になると庶民の衣料は、豊富に、多様になったのです。

(青木成幸)

城下町絵巻にみる風俗の変化

松代十二ヶ月絵巻 にみる風俗



①「年頭の挨拶」(正月)
従者をつれた年輩の武士は白足袋をはき、袴、袴を着用している。これは武士の礼服だった。



②「上巳の節句」(三月)
雛人形や離道具が飾られた部屋に袴を着た老藩士が正座し、奥方は打掛を着ている。

◆ 武家や庶民の服装

一八二三年(文政六)に飯田藩医太田文碩が著した「各々御用慎」によれば、「一七世紀中ごろには、男女ともに油でなくて水で髪を櫛けずり、半紙を裂いたこよりで髪を結い、武家は羽織を着ていた。町人や百姓は絹羽織を着ることができずに、藁草履で歩いていった。文政年間(一八一八〜三〇)以降、百姓の中には、絹布を身につけ、足袋や流行の雷駄をはくものもでてきた。銀ぎせるを使って煙草は名品の国分を喫煙するものもでて」と記され、質沢になった庶民の風俗の変化がわかります。

松代藩士飯島勝休が幕末に記した「飯島家記」によれば、「一八世紀中ごろから、登城の際に袴を着、黒股引をはくようになり、一八世紀初の武家女中の帯は五尺ほどの長さだったのに、近頃は一丈一尺(約三・三六)余にもなり、櫛や弁も大きくなった。武士も明和(一七六四〜七二)頃から紅紋り、紅染めの夏下着や手ぬぐいを持つようになった。肩衣と長袴を着て勤めるようになったのは一八二四年(文政七)からはじまった」など、やはり派手になった武



③「盆踊り」(七月)
高張り提灯の舞台のまわりに、男女が、謡笠、女笠、手拭などをかぶって輪舞している。



④「正月仕舞い」(十二月)
面木綿で覆面し、赤前垂れをつけ、祝言を唱える節季候。縁起物の弓矢や松に撞、魚などもつ尻からげした男たち、土間で片肌脱ぎになって餅をつく男などが描かれている。

(4点とも長野市真田宝物館蔵)

家風俗の変化が書き留められています。

◆身分格式と服装

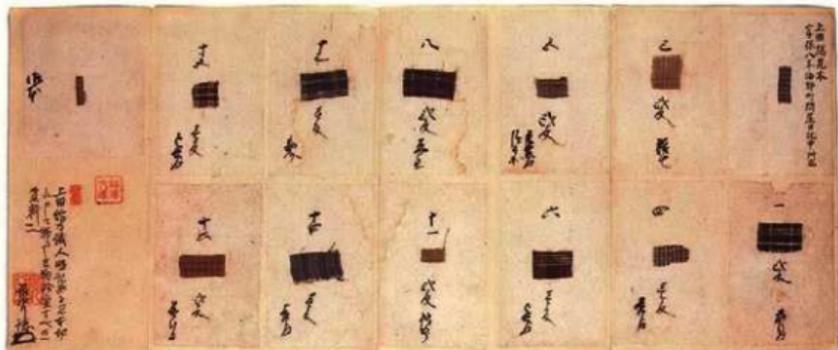
江戸時代には、衣服は視覚的に身分を示す目印で、各層に差別がありました。庶民衣料の高まりとともに身分標識は崩れ、豪農・豪商層も献金などにより御紋付ごもんつき・袴はかまなどの着用を許可され、身分格式を与えられるようになりました。

◆松代十二ヶ月絵巻

松代藩士の娘恩田緑陰おんのだろくいんが、幕末の松代城下町の年中行事と風俗を「松代十二ヶ月絵巻」に描いています。正月の三河万歳みかわばんざい、謡初めと年始まわり、江戸時代では信州最大の祭りといわれた松代祇園祭ぎげんさいのねり物、高張り提灯たてあかりを中心に輪舞する男女の盆踊り、機織はたオリと染物ぞめをする女性、初冬の恵比寿講えびすこう・髪置きかみ置き・袴着はかまぎなどの年中行事、正月仕舞いしなまい(正月の準備)の餅つきなどが描かれ、当時の城下町の風俗や生活などがわかります。

(青木幾章)

染物屋と染料



上田綱の見本帳 1723年(享保8) (橋次輔宏氏蔵)



染料を入れた藍甕



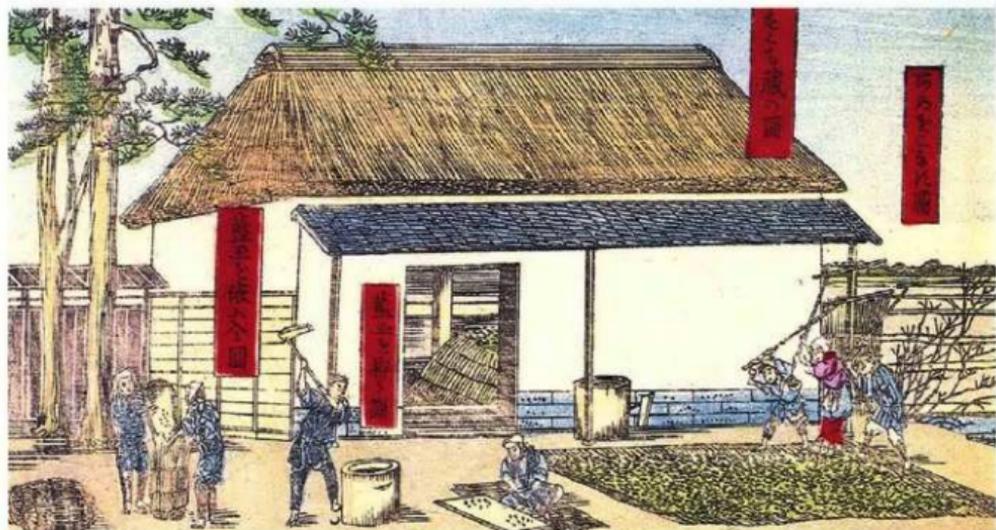
藍色の染料である藍玉 (松本花氏蔵)

◆信濃の染物屋

一七二三年(享保八)に作られた上田綱(縞模様の絹織物)の見本帳があります。この見本帳はもともと海野町(現東部町)の本陣問屋の日記に挟まっていたもので、当時の染料を知る貴重な資料です。天然染料で染めたものなので、色彩の変化が起こっているとされますが、全体として茶系統の色が目立ちます。

縞にするためには、あらかじめ糸を染めて織る必要があります。生糸も綿糸もそのままでは染料をはじいてしまいよく染まりません。そこで木灰を使って糸に含まれる油状の成分を落として、染色の作業に入ります。植物を使った染色は一度では十分色がつかないため、何度も染料の桶に糸を通して染めます。特に藍色に染めるには熟練した技術が必要でした。慣れていないと糸にむらが出てきてしまったり、色落ちしたりします。素人ではなかなかうまく染まりませんでした。

このため信濃の村や町で糸や単物を藍色に染める紺屋が、江戸時代前中期から木綿衣料の広がりとともに増えて行っただけです。



藍色の染料である藍玉製造の作業風景

「藍一覽」(『紋草』 長野県立歴史館蔵)

松本町では一六六九年(寛文九)紺屋が二六軒だったものが、一六九七年(元禄一〇)には三九軒となつています。

◆藍玉の流通

衣類を染める代表的な染料は藍です。藍はタデ科の植物で、全国的に作られていましたが、なかでも阿波国(現徳島県)の特産品でした。信州には藍玉あまごぎの形で入ってきました。これは藍の葉を発酵させ、白でひき乾燥し固めたものです。また江戸時代後期、信濃の藩では藍を植えることを奨励し、幕末には信濃全域で生産されています。

紺屋では糸を預かり染色します。藍は染める回数によって色が浅黄色あさぎから紺色こゝろに変っていきます。染め値段も回数によってあがってきます。藍色に染められた糸は染められていない糸に比べ、重く丈夫になりました。

明治中期ころ国産の藍玉から、輸入されたインド藍に代っていききました。インド藍は国産の藍よりかなり値段の安い染料であったためです。

(小野和美)

地機と高機を使った織物



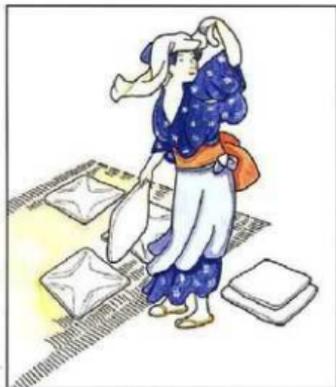
③真綿から糸を紡ぐ



①煮た蒭(6~7粒)を枠にかけて真綿にする。



④初いだ糸を糸草を使ってよりをかける



②枠にかけた真綿をほす

袖糸を取り、上田紬を地機で織る

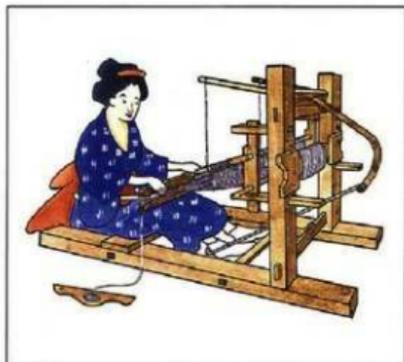
◆上田紬の生産

江戸時代中期以降、信州では上田・小栗地方の絹・紬(絹織物の一種)、諏訪地方の小倉織(木綿織物)の生産が非常にふえました。「和漢三才図会」(正徳二年成立)にも、全国の著名な絹織物の一つに上田紬があげられ、一七世紀後半には上田・小栗地方が紬の産地として知られていました。

上田・小栗地方の人びとは江戸時代、蚕種紙(蚕の卵を和紙に貼ったもの)を信濃国内や他国に売って多くの財産をつくりました。ところが蚕の卵を採ったあとには出殻蒭(穴の空いた蒭)が残ります。この出殻蒭では生糸をとることはできません。また玉蒭(二つの蚕が一箱になりつきた蒭)や、屑蒭(できの悪い蒭)も良質の生糸を生産することができません。そこでこのような蒭をほぐして、真綿を作り、これを紡ぐことによりて糸糸をとりました。経糸に生糸、緯糸に袖糸を使ってつくられた織物が上田紬です。

◆上田絹・紬を織る機織り機―地機―

江戸時代の上田絹・上田紬は地機を使って織られました。地機とは床に腰をおろし



⑦地機を使い、上田織を織る



⑤^{shimada}盤経合を使い、一ないし二反のたて糸をそろえる
最後の段階で綾をとる



19世紀初頭以降信州に広がった高機
(長野県立歴史館蔵)



⑥機にたて糸をかけるため、糸を^{shimada}箆に通す

た姿勢で機を織る道具のことをいいます。吊り綱を足に掛け引くことにより、経糸を持ちあげ横から緯糸の入った村(梭)を入れる空間をつくります。この地機は土台が水平などところから、水平型地機と呼ばれ、東日本で広く使われていました。

◆木綿を織る高機

信州では、一九世紀初頭から機に腰をかけて織る高機が導入されました。綿織物の需要の増大にしたがつて高機が急速に普及していききました。信州でよく見られる高機は京都西陣で絹織物を専門に織るために使われた高機に比べ、土台の長さの短い、半機と呼ばれる機です。同じ型の機は中央日本(岐阜県・長野県・山梨県・群馬県・神奈川県・茨城県・東京都)を中心に分布しています。このことから高機が地域ごとに異なっていたことがわかります。

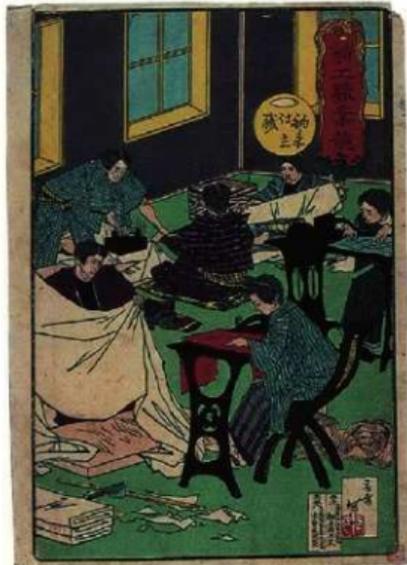
江戸時代後期の信州で、冬期間の女性の仕事は機を織ることでした。

(小野和英)

洋服がやってきた



赤松小三郎（1867年4月撮影）
（上田市立博物館蔵）



しょうしゅうくぎりくわい せいだんしやていしやく
繅工職 業 製 船来仕立 業
（国文学研究資料館史料館蔵）

洋服業者の開業（長野県関係分）

- 1867（慶応3） 松平伊平 岩村田
- 1877（明治10） 荻野憲治 上田海野町二丁目
- 1887（明治20） 堀川伴作 上田新参町
- 1892（明治25） 阿部竹次郎 岩村田
- 1901（明治34） 深堀長左衛門 長野

『日本洋服史』ほかより作成

◆サムライが洋服を着る

上の写真は、上田藩士の赤松小三郎が一八六七年（慶応三）四月に京都で撮影したものです。すでに鬘を切り、散髪で洋服姿をしています。散髪脱刀令の公布は一八七一年（明治四）ですから、それより四年も早く鬘を落したことになります。洋式兵学者として活躍した小三郎でしたが、撮影した年の九月には暗殺されてしまいました。彼の遺品には、士官羽織四着、トンビー着、胴着一着のほか、黒ラシャズボンを含むズボン三本が残されています。

江戸幕府は一八六六年軍服の使用を許可します。軍隊の近代化をはかる中で、洋式の軍服が採用され、明治政府も洋服を積極的に採用します。このように洋装は制服から始まったものと考えられます。

◆サムライ、洋服をつくる

明治初期の洋服は、外国からの購入によるか、外国人洋服店で作られたものでしたが、次第に日本人の洋服店もできてきました。旧上田藩士荻野憲治は上京後、外国人の洋服を解体して研究し、一八七四年麹町で開業しました。三年後、郷里に「西洋服



太鼓胸飾シャツ (丈27cm)



婦人股引 (長さ31cm)



水兵服 (上衣丈13cm)

上田女子技芸学校生徒の作品 1908年 (明治41) (上田市立博物館蔵)



洋式兵服

戊辰戦争に参加した上田藩士の服。襟のしま柄は出陣中の上田藩の標印で、ボタンはイギリス製。

(上田市立博物館蔵)

文明開化スタイルの官員
髪を敷り(シャンプ)帽子を戴き洋服を着
けて、花を映く二八(二六歳、若い娘)と車を
同うし、以て自由を得たりとなすものあり
一八七五年(明治八)三月一六日「信濃新聞」

調達所」の看板を掲げました。当時のミン
ンはドイツ製で、現在上田市立博物館に残
されています。こうして開業した洋服店で
したが、仕事がなく生活は苦しかったそ
うです。

◆珍しい洋服

明治期で洋服を着るのは、官吏・警官・
教員などの公的な人たちに限られました。
上の新聞にあるように、髪を切り・帽子を
かぶり、洋服を着るのが官員のスタイルで
した。しかし、一般には洋服は珍しいもの
でした。

(発原康明)



現在も使用されている大正初年のミシン（中野市 高橋通雄氏蔵）

1910年にパテントを取得したシンガー社のミシンで、シンガー日鋼株式会社によると製造番号から1916年（大正5）から1919年（大正8）の間にアメリカのニュージャージー州エリザベス工場で製造されたミシンであることがわかるという。

◆ミシンはマシーン

ミシンは sewing machine の machine がなまったことばで、幕末に日本に初めて紹介されました。ミシンは軍服などを大量に生産するための衣服を、工業的に縫製する機械であるとともに、家庭での裁縫を容易にする道具として急速に浸透しました。その背景には洋裁の普及がありました。

初期のミシン業界はアメリカのアイザック・メリット・シンガーが設立したシンガー社が世界市場を支配し、日本で使われたミシンもほとんどがシンガー社のものでした。またミシン針もアメリカ製ないしドイツ製でした。

◆レコード針からミシン針へ

昭和初期、満州事変以後の国産品愛用と外国資本排除の流れの中で、ミシンの国産化が本格化し始めます。

こうしたなか、東京で蓄音機の針を製造していた増島製針所がミシン針製造を始めます。一九三七年に日中戦争が始まり世の中が軍国主義化すると、奢侈品（ぜいたく品）の製造禁止が出され、「軽佻浮薄な歌舞音曲」のための蓄音機の針は造ることを禁



ミシン針の包装
(オルガン針株式会社製)



太平洋戦争の末期に製作された竹製のミシン針とその使用説明書
(オルガン針株式会社)

戦争中鉄不足から一般消費者用のミシン針がほとんど製造できなくなり奈良県の大和精針社では竹製のミシン針を製造した。「シンガーミシンなら調子よく縫へます」「金属針の不足何をうれへん 金属は総て戦線へささげ 而して本品の御愛顧を願ひます」とある。



蓄音機 (長野県立歴史館蔵)



蓄音機の針(右)とミシン針
(オルガン針株式会社製)

じられました。このためミシン針専業に切り替え、「オルガン針」の登録名称を使い始めました。

第二次世界大戦中アメリカ軍による空襲が激しくなると、陸軍・海軍にミシン針を納入していた増島製針所も長野県へ疎開することになり、一九四四年に工場を小県郡中塩田村(現上田市)へ移転しました。

◆疎開工場とミシン産業

その後も湿度の低い塩田平はミシン針製造に適していたため生産を続けた増島製針所は一九六三年にオルガン針株式会社に社名を変更し現在にいたっています。

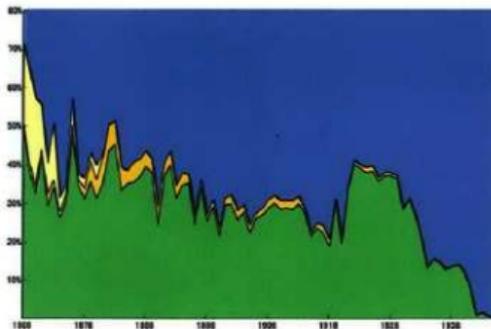
敗戦後軍需品の生産が禁止されると、津つ上製作所や石川島重工のように、長野県に疎開していた軍需工場が、戦後になってからミシンの生産を開始して輸出する例も現れました。戦後は洋装が一般化したため、ミシンはますます一般家庭へ普及しました。

(津津宗伸)

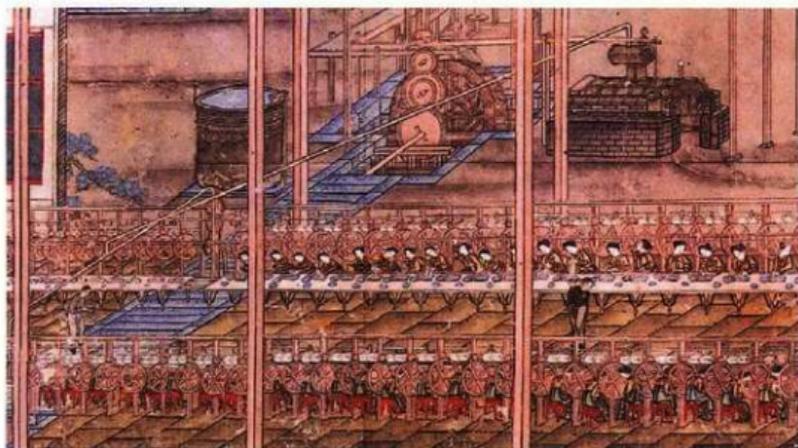
国際商品としての生糸「信州上一番」

日本の輸出総額に占める蚕糸輸出の割合 (1868-1945)

(「横浜市史」資料編二より作成)
生糸以外の蚕糸とは製斗糸・真綿・屑糸・玉糸の総称。



□ 蚕紙輸出割合
■ 生糸以外蚕糸割合
■ 生糸輸出割合



信濃國塩田郡西條邑六工製糸之圖 (長野県立歴史館蔵)

◆生糸輸出が支えた日本の近代化

幕末の開港以来、信州の生糸は品質が良かったことから、諸外国に人気がありました。信州産の上質生糸は「信州上一番」と呼ばれ、日本の代表的生糸銘柄として横浜から盛んに輸出されました。日本は主に生糸を輸出して外貨を獲得したのです。つまり、生糸が日本の近代化を経済面で支えていたのです。

養蚕農家が出荷した繭は器械製糸場で生糸になり、その生糸を巨額な資本を持つ横浜の生糸売込問屋が買い取って輸出しました。幕末に伊那郡小野宿(現辰野町)からいち早く横浜へおもむいた小野兵助(光賢)は横浜の町役人となり、その子の光景は横浜でいくつかの公職を勤めた後に生糸売込問屋となりました。小野光景が始めた小野商店はやがて日本有数の生糸売込問屋に成長しました。

養蚕・製糸業がさかんになった長野県は「蚕糸王国」とよばれました。蚕糸業のより一層の発展を図ろうと、小県蚕業学校や上田蚕糸専門学校、平野農蚕学校のような蚕糸専門の教育機関も設立されました。



横浜の生米売込問屋小野商店



小野兵助光賢
安政6年(1859)に小野宿から開港間もない横浜へ赴き横浜町名主・横浜副市長を勤めた。



輸出生糸につけられたシルクラベル
(長野県立歴史館蔵)

小野光景
横浜正金銀行頭取を辞した後、生米売込問屋小野商店を開業した。のちに貴族院議員も勤めた。



(3点とも辰野町 小野光賢・光景記念館蔵)

◆蚕糸業の衰退

当初は上質生糸として知られていた「信州一番」には、明確な規格がなかったことから品質にばらつきがあり、次第に裾物と呼ばれる低級品扱いをうけるようになっていきました。かわって均質でより細く強度のあるエキストラ格と呼ばれる生糸が輸出の主力を占めるようになり、主にアメリカ向けに輸出され、ストッキングなどに加工されました。しかし、こうした高品質の生糸を生産できる製糸工場は少なく、多くの工場は次第に経営が不安定になって行きます。

化学繊維の登場と一九二九年からアメリカで始まった世界恐慌は、養蚕・製糸業に大打撃を与えました。また一九三一年の満州事変以後のアメリカとの対立、さらに一九四一年の日米開戦は、アメリカ向け輸出で成長してきた製糸業そのものを成り立たなくしました。

第二次世界大戦後に蚕糸業は一時復活しますが、安い化学繊維の普及と輸入生糸の増加で現在では国産生糸はほとんど生産されなくなっています。

ス。ポーツの始まりと衣服

1923年（大正12）当時の
女学生一本杖スキー姿
（長野県政史資料、長野県立歴史館蔵）



持姿で下駄スケートを楽しむ女学生（1929年、三村文明堂写真館撮影、長野県政史資料、長野県立歴史館蔵）

◆「メテレ・スキー（スキーをはけ）」

一九一一年（明治四四）一二月、オーストリア陸軍のテオドル・フォン・レルヒ少佐が新潟県高田町（現上越市）でスキーを伝授したのが、日本における近代的なスキーの始まりです。最初の号令が、「スキーをはけ！」でした。翌年一月飯山では県立飯山中学校の体育教師市川達謙によって、長野県初のスキーが始まりました。当時の服装は制服で、女性には袴姿で防水性もありませんでした。

◆スケート

一九〇三年、諏訪湖ではスキーよりも早くスケートが始まりました。活動しやすいように女学生の袴はズボン風に仕立てたものを使用するようになりました。

スピードスケートに求められる特性は、選手の動きを妨げず、着用しやすく、空気の抵抗を受けないことです。そこで最近では、ポリエステルとウレタンフォームの極細糸を使用し、表面が極めて滑らかなツウエイトリコット編みとなっています。一九九八年の長野オリンピックで使用されたのもこのタイプです。



明治末期女性の水着姿 上越海岸

(神津猛撮影、長野県政史資料、長野県立歴史館蔵)



越ヶ岳温泉付近を歩く登山者と案内人
1904年（明治37）（市立大町山岳博物館蔵）

◆女性が着た水着

明治末から大正時代にかけての水着は写真のように、メリヤスの横縞、袖は半袖、股のところで二つに分かれ半ズボン風になっていました。当時膝から下の素足を見せたところが画期的でした。模様は白地に黒か紺、または海老茶色でよこしまが入っているところから、「しまうま」とよばれました。信州でも経済的に豊かであった人は上越海岸へ海水浴に出かけていました。

◆近代登山の夜明け

明治二〇年代後半から、スポーツ、レクリエーションとしての登山が盛んになり始めます。日本アルプスの魅力を西洋に紹介した、ウォルター・ウエストンらの影響もありました。登山のために訪れる人びとの荷を背負い、道案内をして支えたのは地元の人たちでした。明治時代の山案内人の服装は、登山用の特別な服装はなく里の生活着の延長でした。腹掛に襦袢、よつこぎと呼ばれるズボンに脚絆で足まわりを守りました。履物はワラジで、のちに地下足袋、革靴、プラスチックなどの合成樹脂製に変わっていきます。

(海原康明)

第二次世界大戦中・戦後の服装



割烹着姿の女性
和服にエプロン・モンペという国防婦
人会のユニホーム
(長野県政史資料、長野県立歴史館蔵)



成年男子が着た「国民服」(上田市立博物館蔵)



衣料切符(長野県立歴史館蔵)

◆国民服ともんぺ

戦争が激しくなると、男性は「国防色」といわれるカーキ色の国民服が日常着になりました。国民服は軍服に似た服で、足にはゲートルをまき戦闘帽をかぶりました。いつぼう女性は和服を作り直した筒袖の上着ともんぺが日常着となります。台所仕事のため明治末に考案された割烹着に、「大日本国防婦人会」、「愛国婦人会」などのたすきをかけた姿がみられます。兵士である夫や子の無事を願う「千人針」が縫われ、慰問袋が戦地へ送られました。

空襲から身をまもるために、防空頭巾をかぶって外出することも多くなりました。ファッションの自由がまったくない時代でした。

◆衣料切符

一九四二年(昭和一七)、戦争で物が不足し衣服は配給制となりました。切符がないと衣服が購入できなかつたのです。国民服は三五点、もんぺは一〇点というように衣服に点数をつけ、点数の範囲内でしか衣服は買えなくなりました。



短くなったスカート丈
1967年頃から年々スカート丈は短くなっていった。
(長野県政史資料、長野県立歴史館蔵)



もんぺのあとにやってきたロングスカート (1948年頃から)
(長野県政史資料、長野県立歴史館蔵)



好みの衣服を着てディスコで踊る女性たち。
(長野県広報文書課蔵)

◆ファッションの自由

戦争が終わり、生活にゆとりが生まれる
とおしゃれへの関心も高まりました。さま
ざまなファッションが流行し服装もめまぐ
るしく変わりました。

(梅原康昭)

女学校制服のうつりかわり



1898年和服姿の長野高等女学校本科第1回卒業生
(長野西高校同協会蔵)



2000年3月卒業の長野西高校3年8組の皆さん
(長野西高校提供)



袴姿の長野高等女学校生徒
(長野西高校同協会蔵)



袴姿で戸隠登山をする長野高等女学校生徒
(長野西高校同協会蔵)

◆袴制服の制定

一八九九年、長野高等女学校校長の波辺はしべは袴の着用を生徒に義務づけました。明治初めに高等女学校（四年制または五年制、現在の中学校、高校に相当）の制度が始まったから、服装規定はあっても制服はなく、女学生は幅広の帯に和服を着て登校していました。しかし和服では運動などがしにくく活動的ではありませんでした。

波辺教は実験中心の科学教育をおこなうとともに、戸隠登山を学校行事にとりいれるなど、女学生に科学や運動を奨励しました。当時は若い良家の子女は和服を着てしどやかに生活すべきだという考え方が一般的でしたので、驚くべき先駆的な改革でした。しかし、女性の社会進出にともない、より動きやすい服装が求められつつあったのです。それは洋服の普及という形で現れてきました。

◆袴からセーラー服へ

長野高等女学校を中心に女学生制服の移り変わりを見てみましょう。

一九二一年には「改良服」とよばれる制服が制定されました。上着は筒袖つつそでの和服で



1926年制定の六本筋の制服
(長野西高校同窓会蔵)

1921年制定の改良服
(長野西高校同窓会蔵)



1941年に各校独自の制服が禁止され、かわって制定された標準服
(長野西高校同窓会蔵)

1933年に制定された戦前のセーラー服
(長野西高校同窓会蔵)

制服人形

(野沢南高校同窓会蔵)

とても精巧につくられた人形で、制服の変遷がよくわかる。

下段右が全国統一の標準服

下はスカートという和洋折衷^{セツウサマ}の制服で、翌々年には制帽も制定されました。そして一九二五・二六年にかけて上下とも洋服の制服になりました。

女学生の制服の代名詞のようにいわれるセーラー服が、長野高等女学校に導入されたのは一九三三年からでした。しかし、一九四一年には、国家総動員体制の下で、高等女学校の制服は「標準服」とよばれる全国統一の様式が強制されたために、わずか八年でいったん姿を消しました。

そして第二次世界大戦が終わり、学制改革で長野高等女学校が長野西高等学校となるなかでセーラー服が復活し、あらためて正式な制服に指定されました。

制服自由化の流れのなかで、長野西高校では一九七四年以降はセーラー服の制服は着用の義務がなくなりました。また現在の長野県の県立高校では、男女別学の制度も廃止されています。

(荻津栄徳)



科布を織る



安曇村で織られている科布

日本人が使ってきた天然繊維

北アメリカの極北地方に住むイヌイット（エスキモー）の人たちは、毛皮でつくったブーツをはき、アノラックを着ています。皆さんも着ているアノラックはイヌイットの民族衣装ですが、寒さには強い衣服のために、熱帯を除く世界各地で利用されているのです。

日本人が古くからもちいてきた天然の繊維には、いろいろな樹木の皮や繊維作物が使われています。

そのなかで古代日本で最もよく使われたものに、落葉広葉樹であるシナノキの樹皮があります。シナノクニは科野国と「古事記」に書かれています。これは現在の長野県の領域であったシナノクニは、古代山野にシナノキが多く自生していたからだともいわれています。一五年から二〇年生ほどのシナノキを夏夏に伐り倒して、その皮をはぎ、これを水のなかにつけて表皮をくさらせます。残った内皮をさいて糸に紡いで織ったものが科布です。水に強いので衣服のほか、米

飯を蒸す際の敷布やお酒をしぼる袋などにも使われてきました。いまわが国で科布を織っているのは、山形・新潟・長野の三県のみです。県内では高地上に近い安曇村稲穂の川上忠蔵さん一家が、科布を織っており、民芸品のみやげ物などをつくっています。

マメ科のつる草であるクズの繊維で織ったものが葛布です。また、クズの根を掘って、それをたたいて粉にしたものが葛粉で、和菓子の原料や織物の糊に使われています。葛布は明治時代まで信州でも織られていましたが、いまではつくられていません。静岡県掛川市で織られています。

畑で作られていた繊維作物には、大麻と苧麻があります。綿花の栽培が普及する中世から近世初めまで、主要な繊維製品は麻類でした。

大麻を紡いだ糸の太さによって、麻布は太布と細布に区分されていました。江戸時代になっても綿花の栽培が難しい信州の高冷地では、大麻がもっぱら作られて麻布が織られていました。雪のなかを

歩くとき、水がしみないように袖口を衣服に塗るような工夫をしていました。大麻は衣服のほか、蚊帳・畳糸・漁網・縄などの用途が広いので、大量に作られていました。長野県では第二次世界大戦後まで筑摩山地が日本有数の大麻の産地になっていました。いまでも信州新町では大麻が作られています。

苧麻はカラムシともいいますが、多年生であるので、毎春枯れた根元を焼いて再生力を強めています。なお、秋山郷では野生の苧麻が自生しています。江戸時代から近代における県下の苧麻栽培は大麻にくらべて量的に多くはありません。

この苧麻の纖維は大変細いので、薄い上布や縮に織られ、最高級の夏衣料に用いられています。上布や縮は新潟県六日町盆地で織られています。第二次世界大戦後までは、栄村や飯山市岡山地区でも上布や縮が織られていました。

いまでも世界で最も多く利用されている衣類は綿布です。信州には伊那地方南部に戦国時代に東海地方から伝わりました。この綿花栽培がもつとも普及したの

は長野盆地で、江戸時代中期には有力な商品作物になりました。千曲川の沖積地では畑の五割までも綿花を作っていた村もありました。一八九六年（明治二九）

綿花輸入の自由化以降、急激に栽培は衰えました。いまでは自家用に綿をわずか作っている農家がみられるにすぎません。わが国では現在化学纖維が大半をしめていますが、綿糸は保温性・吸湿性などで化学纖維よりは優れているので、根強い需要があります。

信州は江戸時代中期以降、養蚕が發展しました。一八八〇年（明治一三）から一九五三年（昭和二八）まで、日本一の養蚕王国になりました。養蚕は桑の栽培と蚕の飼育が結びついた農業経営です。そこで飼われている蚕を家蚕と呼んでいます。蚕がつくった繭からとった糸が生糸です。これに対して、クヌギ、コナラ

などの落葉広葉樹の葉を食べさせて蚕を成育させる養蚕があります。ここでの飼われている蚕を山蚕といいますが、成熟すると体長が七センチほどにもなり、薄い緑色の繭をつくります。この山蚕が日

本原産の天蚕です。また、中国や東南アジア原産の柞蚕はセピア色の繭をつくります。天蚕系でつくった織物は後で染色しても色が染まらない性質をもっています。そこで天蚕系は高級絹織物に欠くことができない素材として、京都西陣などの機業地では珍重されています。

長野県は日本第一の天蚕の産地で、一九三〇年代まで安曇野のみで三千ヘクタールの飼育林がありました。第二次世界大戦後、飼育林であった平地林の水田化や宅地・別荘地への転用が進んだために天蚕の飼育が衰えました。しかし最近天蚕系のもつ天然纖維のよさがみなおされて、安曇野のみでなく、須坂市をはじめ県下各地で天蚕飼育の復活がはかられています。天敵の鳥や昆虫の被害を防ぐため、ネットを張って飼っています。

西陣や桐生などの織物の先進地では、主として中国から柞蚕糸を輸入していますが、最近タイやインドネシアでは、天然繁殖の山蚕の繭の採取が行われ、その糸は日本にも輸出されています。

（市川健夫）

参 考 文 献 (五十音順、敬称略)

- 秋田県立博物館編『よみがえる縄文フアッジョン』(一九九七)
石井寛治『日本系系業史分析』(東京大学出版会 一九七二)
一宮市博物館編『平成二年春季特別展 地機で織る―越後編―』(一九九〇)
岩下哲典『地域の歴史をどのように叙述するか―再発見の地域史・信州人小野光賢・光景父子 横浜に生きるを具体的に―』(『明海大学教養論文集No.九』一九九七)
上田市立博物館編『図録明治の上田』(一九八九)
上田市立博物館編『松平忠固・赤松小三郎』(一九九四)
上田袖研究会編『信州上田袖』(郷土出版社 一九八四)
大阪府立弥生文化博物館編『卑弥呼の世界』(一九九二)
大阪府立弥生文化博物館編『卑弥呼誕生』(一九九七)
尾崎行也『幕末期上田領田中組村役人の分析』(『千曲 二四号』東信史学会 一九八〇)
尾関清子『縄文の衣』(学生社 一九九六)
『オルガン針三十五年史』(オルガン針株式会社 一九八二)
開田村教育委員会編『木曾の麻衣』(一九七三)
切畑健『京都書院美術双書日本の染織8 能装束』(京都書院 一九九三)
『講座・日本技術の社会史 第三巻 紡績』(日本評論社 一九八三)
坂井秀弥編『立体復原 日本の歴史上 原始・古代編』(新人物往來社 一九九七)
坂井秀弥編『復原 技術と暮らしの日本史』(新人物往來社 一九九八)
佐久市教育委員会編『北西の久保』(一九八四)
佐藤泰三『日本の美術第一三二号 職人尽給』(至文堂 一九七七)
下関市立博物館編『弥生の装い―アクセサリーとその呪術性』(一九九九)
『新版絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社 一九八四)
高崎市観音塚考古資料館編『装身具展 古代人のアクセサリー』(一九九九)
角山幸洋『地機の形式分類』(『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』藤井祐介君を偲ぶ会 一九八〇)
長崎巖『京都書院美術双書日本の染織4 小袖』(京都書院 一九九三)
長野県埋蔵文化財センター編『いま信濃の歴史はよみがえる』(一九九二)
長野県埋蔵文化財センター編『赤い土器のクニ』(一九九四)
長野県立歴史館編『一九九七年秋季企画展図録 長野県にみる世界の文化―シルクの歴史と文化―』(一九九七)
中山千代『日本婦人洋装史』(吉川弘文館 一九八七)
日本洋服史刊行委員会編『日本洋服史』(洋服業界記者クラブ 一九九七)
布目順郎『倭人の絹』(小学館 一九九五)
平野勝重『サムライ洋服を着る―赤松小三郎の幕末』(『髪』No. XI 一九九八)
『Precision Tsuami(過去と現在との対話)』(株式会社津上製作所 一九六二)
古川貞雄『江戸時代の生活変化―飯島家記』抄』(『長野』一〇号 一九八五)
松沢かね(著者兼発行者)『織りへの誘い』(一九九六)
丸山伸彦『京都書院美術双書日本の染織3 武士の装い』(京都書院 一九九四)
『六十年のあゆみ』(長野県長野西高等学校 一九五六)

協力者のみなさん（五十音順、敬称略）

青森県教育庁三内丸山遺跡対策室

安楽寺

上田市立博物館

大阪府立近つ飛鳥博物館

大阪府立中之島図書館

大阪府立弥生文化博物館

大原英嗣

尾崎行也

尾関清子

小野忠秋

オルガン針株式会社

片倉工業株式会社

川越市立博物館

川上忠蔵

喜多院

宮内庁侍從職

宮内庁正倉院事務所

国文学研究資料館史料館

国立歴史民俗博物館

(財)五島美術館

西福寺

佐久市教育委員会

(株)サンヒーム

真田宝物館（松代藩文化施設管理事務所）

澤頭修自

市立大町山岳博物館

志摩晴樹

シンガー日鋼株式会社

神護寺

大本山石山寺

高橋達雄

滝沢秀一

谷田博文

中宮寺

十日町市博物館

東京国立博物館

長野県総務部広報文書課

長野県埋蔵文化財センター

長野西高等学校同協会

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

野沢南高等学校同窓会

東筑摩塩尻教育会

福井県立若狭歴史民俗資料館

福島県昭和村からむし生産技術保存協会

古川貞雄

(株)便利屋

松本市立考古博物館

松本花

三村俊二

柳沢楊宏

あとがき

長野県立歴史館では、毎年一冊ずつ、テーマをきめてブックレットを発行しています。六冊目のこの本は、衣服の歴史について、小学生や中学生のみなさんにも興味をもって読んでもらえるように企画・編集したものです。最新の研究成果もとりいれながら、長野県内の資料や県立歴史館の展示資料を中心に構成してみました。みなさんの学習にも役立つものと思います。

この本を参考にして、歴史をもっと深く勉強してみたいというみなさんは、ぜひ歴史館へ来てください。歴史館ではこの本に載っている資料の展示や多くの歴史の本などを公開しています。また、専門の職員がみなさんの質問にもお答えします。

本書のために、貴重な写真や資料などを快くご提供くださった多くの方がたにお礼申し上げます。

二〇〇〇年三月

長野県立歴史館

編集・執筆

青木歳幸、市川健夫、伊藤早子、梅原康嗣
小野和英、小柳義男、寺内貴美子、傳田伊史
林津宗伸、樋口和雄、福島正樹



利用案内

(開館時間)

午前九時～午後五時

(入館は午後四時三〇分まで)

(休館日)

日曜日(祝日・振替休日にあたるときは火曜日)

初日の翌日(日曜日にあたるときは開館)

神蒸等師長が定める日

十二月二十八日～一月三日

(常設展覧資料)

一般 高校生・大学生 七〇円

個人 三〇〇円 一五〇円

団体 二〇〇円 一〇〇円 五〇円

(団体二〇名以上)

学校の教育活動として観覧する長野県内の小・中・

高校生および障害者手帳をお持ちの方と介護者の方

は減免になります。

(交通案内)

長野新幹線上田駅で乗り換え、しなの鉄道歴代駅から徒歩二五分

長野電鉄河原線東歴代駅から徒歩二〇分

長野自動車道・上信越自動車道更埴ICから車五分

更埴道路バス停「上信越道 歴代」から徒歩三分

長野県立歴史館

信濃の歴史と風土(Ⅱ) 衣あむ・おる・きる I

二〇〇〇年(平成一二)三月二五日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒三八一〇〇〇七 長野県更埴市歴代字清水二六〇一六

電話(四)二六一二七四―二〇〇〇

FAX(四)二六一二七四―三九九六

印刷 信長書報印刷株式会社

表紙写真 しろくまざしやちくばいひのうらもんこぞう 白輪子松竹梅疋田紋小袖 (長野県立歴史館蔵)
裏表紙写真 片倉工業株式会社 旧岩代工場のシルクラベルより (長野県立歴史館蔵)
背景写真 復原された北村人の衣服 (長野県立歴史館蔵)

